

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使える
本邦初の連句辞典

版 B6判
三五二頁
三五〇〇円

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三三四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句日 差合 去 式目 四春八木
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二二〇〇円
俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円
現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

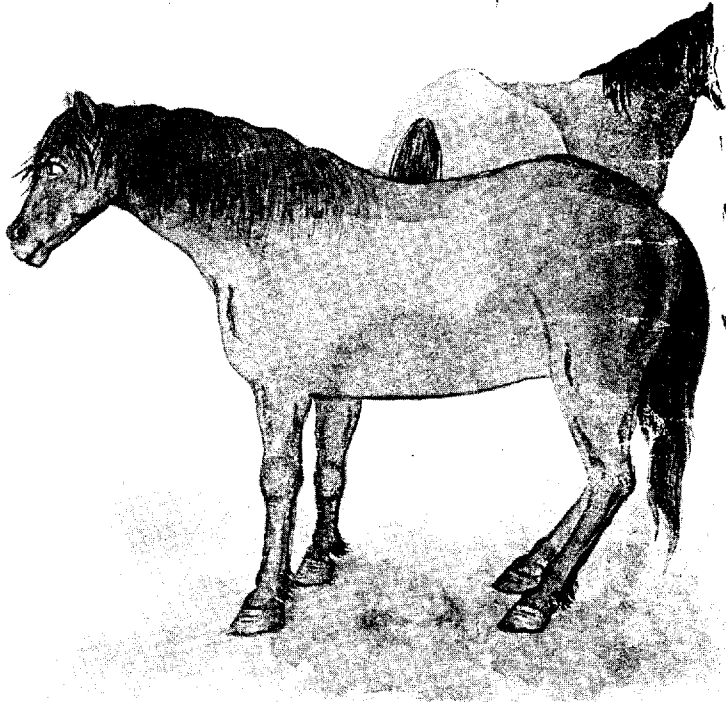
大後美保編 二八〇〇円
季語辞典

日本の季節によつて変わる言葉をストック・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円
難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

第30 連句 季刊



- 国語学大辞典 B5 一八〇〇円
- 国語慣用句大辞典 A5 一六〇〇円
- 国語慣用句辞典 B6 二二〇〇円
- 国語史辞典 B6 一八〇〇円
- 日本語源辞典 B6 一八〇〇円
- 京都語辞典 B6 一八〇〇円
- 擬音語擬態語辞典 B6 一八〇〇円
- 隠語辞典 B6 一八〇〇円
- 近世上方語辞典 A5 一五〇〇円
- 花柳風俗語辞典 B6 二二〇〇円
- 新語俗語辞典 B6 二二〇〇円
- 難訓辞典 B6 二二〇〇円
- 名乗辞典 B6 二二〇〇円
- 名数数詞辞典 B6 二二〇〇円
- あいさつ語辞典 B6 二二〇〇円
- 新版 ことば遊び辞典 B6 二二〇〇円
- 類語辞典 B6 二二〇〇円
- 類義語辞典 B6 二二〇〇円
- 表現類語辞典 B6 二二〇〇円
- 新版 文章表現辞典 B6 二二〇〇円

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7 電話03-233-3741-2

第三十号を迎えて（南柏雜記 28）	1
連句の作り方	東 明雅 2
灰汁桶の雫	佐藤廣幸 6
「鳶の羽も」の巻鑑賞（IX）	東 明雅 8
「吉野」の恋句	秋元正江 11
「蓑虫」付勝練習二十韻	12
沙羅の会	14
第三十四回 猫蓑会 歌仙七卷 18	
捌 市野沢弘子 内田麻子 梅田利子	
米谷貞子 杉内徒司 中島啓世	
原田千町	
開かれた「猫蓑会」	式田和子 22
鳴立庵の記	品川鈴子 24
名古屋「笹」の会	伊藤敬子 25
二十韻六卷	26
国民文化祭ちば91 連句大会に向かって	下鉢清子 28
雁帛往来	29
新刊紹介	21・23

09月30日 15時31分
 HCWTO4 初校
 * * * * *
 22H14G
 総行数 14行

第三十号を迎えて

南柏雑誌記 28

雅

季刊連句が今号で三十号に達した。昭和五十八年の創刊から七年余、この間、一回の欠号・選刊もなく出し続けられたのは、編集・発行に直接助力して下さった方々の努力の賜であるが、それとともに私どもの連句に対する考え方を支持して、貴重な原稿をよせて下さった方々の厚意と、また、猫養会を中心とした連衆の方々の熱意に支えられたものであり、ここに改めて皆様にお礼を申し上げる。

この七年間に、連句の世界も大きく変わったように思われる。まず、連句復興というか、復活というか、その気運が社会全体に漲って来たことを痛感する。それを背景にして、念願だった国民文化祭への参加も、鈴木春山洞氏を中心とする方々の、献身的な尽力で、今年の愛媛県で実現することになった。そして、この国民文化祭へ参加する条件の一つとして、連句懇話会が連句協会へと改組された。また、私ども季刊連句の内部においても、従来、歌仙形式一本槍であったのが、昭和五十九年に新しく二十韻という形式が生まれて、今は歌仙と併用され、かえって歌仙形式を圧倒するようになった。また、季刊連句の母体である猫養

会も改組され、会員の数が倍増する勢である。本紙の紙数も、創刊のころは毎号二十一頁で、それでも掲載する作品がなかなか弱ったが、いっよりか二十五頁に増え、今日では二十九頁になった。いろいろの会の作品が多くて載せきれず、いずれまた増頁しなければならぬと思っている。これも連句隆盛の一現象であろう。

思いおせば、季刊連句の創刊号に私が書いた「連句の復活とその将来」という一文の予言が、その通り実現しているというわけで、私としては非常に嬉しく、ますます、自分の使命を痛感している次第である。

それは、同じ創刊号の「発刊の辞」に、私は「先師（芦丈先生）の遺志をつぎ、先師から学んだ蕉風連句の種を蒔き、その芽生えを大切に育てて行こうと思う」と書いた。その種を蒔き、芽を育てる仕事は自分では果たしたつもりであるが、果して十分だったか否か。

さらにその文章の先きに、「庶民の文芸であり、座の文芸である連句に、芭蕉以来の不易の格を守りながら、現代の流行に即した新しみを求め、万人の胸の琴線にひびく作品を創り出すのが、私どもの究極の願いである」と私は書いていたが、この理想にはまだまだ遠いような気がする。

季刊連句も三十、人間ならば而立のよい歳である。もう一度、初心に立ち帰って新しい決意で頑張りたいと思うので、皆さんの御協力・御支援を切に祈る次第である。

連句の作り方

東明雅

連句とは、Aという句にBという句を付け、そのBの句にまたCの句を付けるというように、付けるということが基本である。そして、その場合、Bという句の中にはA句とC句とは、同種・同類・同量・同様のものではない。これを転じという。このように、連句は付けと転じによって一巻が作られる。連句のメカニズムは付けと転じである。

それ故、よい連句を作り、あるいは鑑賞する第一歩は、一巻の付けと転じとがどのように行なわれているかにあり、これを探り知ることになる。

連句を芸術的に完成したと言われる芭蕉は、この付けと転じにそれぞれ独自の新しい手法を発明したのであった。それ故にこそ、彼の俳諧（連句）は、それ以前のものと比較にならないくらい素晴らしいものとなったのであった。

そして、その新しい付けと転じの新しい手法は、芭蕉の直門である向井去来・立花北枝・各務支考などの高弟によって更に磨きをかけられ、さらに中興期の与謝蕪村・高井几童らに受けつがれた。ことに、高井几童（寛政元年没）

は、芭蕉の発明したこの付けと転じ、いわば連句制作の鍵を「付合手引蔓」（天明六年刊）という一書にまとめ、我々のために残してくれている。

私はここに、この「付合手引蔓」に倣って、芭蕉が発明し、蕪村・几童らにまで伝わった付けと転じの手法について述べてみたい。

まず、付けについてである。芭蕉が従来の物付（前句の中の言葉にすがって付けてゆく方法）・心付（前句全体の意味によって付けてゆく方法）の手法から飛躍して、いわゆる余情付けの手法を発見したことは、もう周知の事実である。「先師曰く、発句はむかしよりさまざま替り侍れど、付句は三変也。むかしは付物を専らとす。中頃は心付を専らとす。今は移り・響・句・位をもって付けるをよしとす」（去来抄）という向井去来の言が示すように、貞門時代の物付、談林時代の心付の手法を脱却して、前句と付句との間に、読者の想像が自由に入りこむことのできる余地を作り出すことができた。物付・心付は連歌という親句、（前句と付句との間隔・距離が近いもの）にあたり、余情付は疎句（前句と付句との間隔・距離が離れて、遠いもの）

にあたるであろう。

余情付は誠に画期的な新しい手法の発見であった。これは簡単に言えば、前句の言葉や意味よりも、前句のもつ微妙な雰囲気や余情に応じて付けて行くものであって、その中に移り・響・句・位などの別があることは去来抄の示す通りである。現代連句から例をあげて説明しておこう。

○移り 檻めけし猿が花から花へ逃げ 陽に映え流る春川の塵

前句は花の句であるが、檻から抜け出た猿が満開の木から木へ逃げまわるといふ情景は、思わず吹き出したくなるようなおかしさがあり、明るい気分満ちている。付句はその浮き浮きした気分を鋭くとらえ応じているのである。前句の激しい勢いをやや穏かに受けとめているだけでなく、その勢いを一句中に映し、二句間に映発している点から、映りといふ意もあるう。

○響

ミンクを脱げば全裸なる美女 毒菓の罐がきらめく手の中に

響とは、打てばひびくといふところから出た言葉であるが、そのような前句の気分に応じ、そのひびきを受けて同じようなものを付け合わせるをいう。全裸の美女にハッと胸をつぶした驚きが毒菓の罐につらなり、ミンクのコートの美しさは付句のきらめくといふ語を受けている。このように緊張し、切迫した余情を受けて応じるのを響という。

○句

へヤピース取れば若妻少女めき 滝にかかりし円光の虹

前句は美しい若妻がくつろいでへヤピースを取り化粧を直している情景でもあろう。着飾った若妻の美しさはもちろぬすばらしいけれども、余計な飾りを取って生地的美しさと若さがむき出しになった時の感じはまた格別で、何かそれは眩しいような清らかさが満ちあふれている。付句は改めて説明するまでもないが、滝のしぶきの中に円い虹がかかっているのを見ることがある。そしてその円い虹の清らかさと美しさがまさに少女の香を残した若妻の美しさそのものである。このように、この前句と付句とは意味の上では直接何の関係もないにもかかわらず、まったく余情が通いあっている。余情と言っても響や移ほど激しく、切迫したものでない点が異っている。

○位

銀笛の緑陰遠くひびく時 恋に死なむと風の囁く

位とは前句の人物や事物の品格に応じたもので付ける付方である。銀笛は貴公子が持つにふさわしいロマンチックなものである。そしてその貴公子の位に應ずる恋は、打算を離れて愛に殉ずるものでなければならぬ。

痴戯をする春婦に深き悲しみも 鮫鱗釣られ裂かれ煮らるる

肉体を売って生きて行く不幸な女性。それは魚にたとえるならば、鯛や鯉の品格はない。鮎の潑刺としたところ、

白魚の清らかさ、そんなものにも関係はない。男のするがままになる悲しみは、ちょうど鮫鱗が肴屋の店先の鉤につるされ、客の注文に応じて切売されるのによく似ているというわけである。位については二つとも恋の句で例を出したが、同じように去来抄にも恋句の例をあげて、位の説明をしている。読みくらべて味わっていただきたい。

以上で、芭蕉の付けにおける新手法についての説明を終り、続いて、彼の転じにおける新手法について述べてみよう。これはすべての句を人情自の句(句中の人物が自分のことを述べた句)・人情他(他人のことを客観的に述べた句)・人情なし(叙景・叙事の句)の三つに分け、それぞれが打越にならぬように考慮して行く手法である。

(打越) へヤピースとれば若妻少女めき (人情他)

(前句) 滝にかかりし円光の虹 (人情なし)

(付句) ハーケンに汗の飛びちる岩登り (人情自) 打越と前句は例の余情付(句)であるが、前句を實際高山の滝と見て、それに岩登りの若者を出したのである。このように人情なし(場の句ともいう)の句に、人情の句を出すのを起情の付けという。打越の若妻は人情他、付句は岩登りをしている若者が自分の実況を述べた人情自の句である。

(打越) 滝にかかりし円光の虹 (人情なし)

(前句) ハーケンに汗の飛びちる岩登り (人情自)

(付句) たばこの煙にむせぶだみ声 (人情他)

この付句は前句の岩登りしている人が、煙草をくわえながら登っていると見て、その煙にむせんだ訛声を付けたものである。このような付けを其人の付けというが、打越は人情なしであるから、付句は人情なし以外なら何を付けてもよいのである。

(打越) ハーケンに汗の飛びちる岩登り (人情自)

(前句) たばこの煙にむせぶだみ声 (人情他)

(付句) 猪鍋に猟友集ふ月の下 (人情他) このように人情の句が三句並んでも、打越が自、付句が他となっていてるので、観音開き(輪廻)になる心配はない。自・他・場(人情なし)がそれぞれ打越にならないようにすれば自ら転じが出来る。さて、この付句は猟友が月下に猪鍋を囲んで手柄話にくつろぐ和やかな情景が眼に浮んで来る。前句のだみ声の人を見定めた付句でこのような付けを其人の付けというが、また考え様によっては、そのだみ声を聞いた場所を月下の猪鍋の場所と定めた付けとも考えられる。そのような付けを其場の付けと言うのである。さらに言えば、前句のたばこ・だみ声は付句の猪鍋・猟友と何か品格に近いものがある。位付でもあろう。

(打越) たばこの煙にむせぶだみ声 (人情他)

(前句) 猪鍋に猟友集ふ月の下 (人情自)

(付句) 爽やかな碑の個性ある文字 (人情なし) 打越が人情他であるから、付句は人情なら自、あるいは人情なしで付けるべきである。この付句は個性はあっても碑は碑であるから人情なし。猪鍋で気焔を上げている傍に

たまたまあった碑を取り上げたままで、このような付けを其場の付けと言ひ、前句を真正面から受け留めて付けるのではなく、その辺にあるものをちよつと取り上げてあしらったものであるから、このような付け方を会釈の付けとも言うのである。打越の境地から鮮やかに転じている。

(打越) 猪鍋に獵友集ふ月の下 (人情他)

(前句) 爽やかな碑の個性ある文字 (人情なし)

(付句) 子規忌来る路通のあはれ思ふ日に (人情自)

前句は人情なしの句、これに人情の句を付けるのは起情の付けであるが、もつと具体的に説明すると、前句の碑は誰か俳人の書いた句碑でもあったのであろう。そこから子規忌とか路通(芭蕉の門人で、乞食坊主と言われた俳人)とかを思い付いて付けたものである。子規とか路通とか人名はあるけれども、それは夙くの昔に歿した人である。その人々を偲んでいるといふのであるから、人情自の句である。打越は人情他の句、それだから、ここは人情自の句でないこととなる。

(打越) 爽やかな碑の個性ある文字 (人情なし)

(前句) 子規忌来る路通のあはれ思ふ日に (人情自)

(付句) 巴里落ちして戻るみちのく (人情自)

付句の巴里落ちをして故郷の陸奥へ帰った人がたまたま子規忌に、不遇であった路通のことをしみじみ思っているといふ、前句の人の状態を叙べているから、其人の付けである。打越は人情なしであるから、付句は、人情自で転ぜられてゐる。また、打越が爽やかといふ季語のためか明る

い気分であるのに対し、この付句は、何か失意の人を連想させ、それが前句の路通のあはれとは非常に付味がよいのであるが、打越の気分からは一転している。このように前句の景状を正面から受け止めて付ける付け方を有心の付けといふ。

(打越) 子規忌来る路通のあはれ思ふ日に (人情自)

(前句) 巴里落ちして戻るみちのく (人情自)

(付句) チェリーブラッサムズ異国の客の眩くを (人情他)

巴里から帰った人が、日本で外人の観光客の一团に逢い、オオ、チェリーブラッサムズと言っているのを聞いたといふわけである。前句の人に對し、別の人を付ける、これを向付けと言ふ。この句は実は花の定座であった。花の定座には、必ず花という言葉を出さねばならないが、この巻はすでに発句で餅花という冬季の正花が出ていたために、ここでは同じ桜を表わす英語を用いても許されるのである。

(打越) 巴里落ちして戻るみちのく (人情自)

(前句) チェリーブラッサムズ異国の客の眩くを (人情他)

(付句) 一年生の靴のピカピカ (人情他)

前句の観光客の来る春の頃はまた入学式のシーズンでもある。異国の客に交つた一年坊主の可愛らしい姿を描いたもの。前句の人に他をもつて付ける、これも向付である。打越が悲痛な暗い気分であるのに対して、この句はまことに明るく、あたたかまで、ほほえましい気分になっている。このように前句を挿んで、打越と付句とが気分まで一転している。これが転じである。

灰汁桶の雫

佐藤 廣 幸

灰汁桶の雫やみけりきりなくす
あぶらかすりて宵寝する秋

凡兆
芭蕉

右は、芭蕉七部集の第五集『猿蓑』に収められた四歌仙のうちの一つの発句と脇である。化学洗剤が普及した今日、灰汁(あく)を実際使って、洗濯をした経験をもつひとは、恐らく明治生れの僅かな御婦人だけではなからうか。大正生れの人の中には母親の洗濯するのを見て知っているという人が僅かにいる程度であろう。「灰汁」とは字義通り、藁灰に水や湯を通してできた、ぬめりのある石灰質の溶液である。大正八年(一九一九)生れの私は、幼いころ、明治十六年(一八八三)生れの母が、大島地か銘仙地だったか、着物をはぐして、家で洗い張りするとき、生地を痛めないように、灰汁を使っていたことをかすかに憶えている。そのころ俵などを戸外でもやし、そこにできた藁灰を丁寧に集めて火鉢の灰にしたり、また灰汁をとるためにこの灰を使っていたように憶えている。しかし灰汁桶となるかどんなものを使って、どのようにして灰汁を作ったのか全く記憶にはない。

昭和四年、岩波書店より刊行された、東北帝大の教授連

による論講『芭蕉誹諧研究』の中で、明治十七年福岡県京都郡生れの小宮豊隆氏は子供のころを回想して、灰汁桶について次の様な具体的な説明をしている。「灰汁桶というのは、四斗桶の様なものに灰を入れて、夫に水をくぐらせ、その水が樽の様なものに灰を入れて、夫に水をくぐらせ、その水が樽の呑み口みたいな所から流れ出る様な仕掛になっている。灰汁をとる桶の事をいふのでせう。云はば灰で水を漉すわけだから、灰汁は雫になつてポタリポタリと、下の受の壺か何かに落ちる。それがちつとも音がしなくなつたと思ふと同時にきりぎりすが急に鳴き出した。といふのだからと思ひます。僕の田舎の灰汁桶には呑口がある。『倭漢三才図会』にも同じ様な絵が載つてゐる。僕の田舎の百姓家を例にとると、家の内部の半分が土間で、半分が畳の間だ。その土間を庭と名づけて、そこに俵を積んだり、唐臼を置いたり、味噌桶を置いたりする。従つて僕はこの灰汁桶のありどころを、かういふ土間の片隅に想像する。」このように小宮氏の説明が大変具体的であるだけに、それ以後に出た『猿蓑』の註釈には殆んど、この小宮説を敷衍したような、小宮説と大同小異な灰汁桶の解説になつてゐた。私はそれらを読んで、昔は田舎では、どこの家庭でも

四斗桶ぐらいの大きさの灰汁桶が設けられ、下部の栓口から灰汁が流れ落ちるような仕掛けになった灰汁桶が据えられていたのかという素朴な疑問を抱いていた。

昭和二十六年、三省堂より刊行された芭蕉講座の樋口功氏（明治十六年、新潟県西蒲原郡生れ）の連句評釈には始めて、灰汁桶を、「桶の上に灰を入れた箆を置き上から熱湯を注ぎ、桶にたまった水を洗濯に使う」という説明になっていた。私はこの解説でそれまでの疑問がとけた思いがした。小宮氏の実家は田舎でも、庄屋か、それに準ずる大百姓の家柄で、灰汁桶にしても当時の一般農家のものとは類を異にしていたに違いない。

もう一つ灰汁桶の具体例を記しておこう。昭和五十一年に刊行された、小島吉雄氏の『芭蕉と奥の細道とどこどこ』の中で、小島氏（明治三十四年、大阪府北河内郡生れ）が、少年のころの記憶にもとづいて回想した灰汁桶を次のように記している。「わが少時まだランプを使っていたころのことである。箆に灰を入れて桶の上へのせ、その灰の上から箆一杯の水を張っておくと、灰汁が箆の目を通って桶にしたたり落ちる仕掛けにして、大抵夜の間に灰汁を取っておくのが、京阪地方の田舎家の習わしであったが、わたくしは、少年時代に土間の隅においてある桶に箆から灰汁がポトンポトンと滴り落ちるその音にまじってその桶の蔭に鳴くこおろぎの物佗しいときれときれの声を聞いた秋の夜、ごろをこの句から、まざまざと憶い起すのである。」より一層具体的な追憶談である。

灰汁桶を實際使った人の話として聞き出したことを次に書留めておこう。

「灰汁で洗うと染めが落ちず、よく洗濯ができたものです。灰汁桶は一斗桶ほどの家にありあわせのものを使いまして。その桶を台所の片隅におき、箆をその上に乗せ、その箆にこれもありあわせの使い古しの木綿切れを敷き、その上からお椀に水を汲み、日に何度か注いでおくと、箆から下の桶の中にポトリポトリと灰の中を通ってきた雫が滴り落ちてアクがたまります。これをお椀ですくいあげ、お湯をませ洗濯に使います。相当ぬめりのある液で、生地を痛めずよく垢が落ちました。灰はいろりの灰を使いました。が、わらを焼いた灰が一番です。」

これまでの話を総合すると、『猿蓑』の古註の中では次の柳津魚潜の『附合考』の註が最も適切ではないかと思われる。「灰汁桶は背戸うらの口の軒下塵塚などの傍に有事なべてのさま也。秋のすへ、洗ひ物の用意にとて、古き桶

私は樋口氏とそれにつづく小島氏のこの回想を読み、これこそ凡兆が詠んだ灰汁桶で、どこか家庭にもあった至極簡便な空桶を利用した生活用具だと思ふようになった。小島氏が言われるように、「俳諧の鑑賞には特に風土的体験に随伴する感情の作品への移入が重要な役割を果す」とはまさに至言だと思ふが、かなしいかな現代のように大きく生活様式が変わると、こうした感情移入も不可能になっ

てくる。芭蕉と殆ど同時代を生きた、江戸初期の一流の本草学者、人見必大の著作『本朝食鑑』が、近年東洋文庫から、島田勇雄氏の訳註と詳細な解説を付けて出版された。その第一冊に次の様な参考になる記述があり、先きの小島氏の回想にピッタリ重なり合う。「阿久、凡そ稲草の灰を水に漬けて淘羅に盛り水が流れ尽きると復水を加え、こうして下の桶の中に垂らし漉して出来た灰水を俗に阿久という。これは衣服の古い垢を能く除く。」

『猿蓑』の巻かれた元禄時代には、この様な薬灰と箆と桶をよる簡単な方法で洗濯に必要な灰汁が作られたという確信をますます深めることができた。しかし未だ『猿蓑』の注釈の中には、何んの疑問も抱かず、紺屋や染屋の営業用や大家で使うような大きな灰汁桶が一般家庭で使用されていたような錯覚を抱かせる解説をしているものをまゝ、見受ける。良心ある態度とはいえない。

私は最後にもう一つ、明治三十一年、福井県大野市生れでその頃大阪府柏原市に住む知り合いの老婆から数年前、

取り出して灰たるゝいかきに、薬灰の雫の落たる音やみたるに、針業（筆者註、針仕事のことか）のいとまなきさままでおもひやられて哀なり。」伊藤正雄先生が言われている通り、「昔の常識が現代の常識でなくなっているところに俳諧解釈のむずかしさがある。」と、これは芭蕉の脇の句にも言えることで、「油かすりて」についても諸説があるが、私は前述の小島氏が述べる次の説に賛成である。「秋の長夜、夜なべでもしよと思つて、行燈の油が切れたようである。油を差そうとして油壺を取り出したが、それにもない。かすつてみたけれども一雫ほどしかない。今さら油を買いにゆくのも億劫だから、ええまよとそのまま宵寝してしまふ。」元禄七年六月二十四日付杉風宛芭蕉書翰に「米びつの底かすらぬやうに致せ」と記したのと全じ用法で、すでにものがなくなっている意味が含まれているという小島説が私には当っているように思われる。

「鳶の羽も」の巻 鑑賞 (IX)

東 明雅

せはしげに櫛でかしらをかきちらし
おもひ切たる死ぐるひ見よ

史邦

（雑。人情白）
（現代語訳）乱戦でさんばらになった髪を櫛でせわしげに掻きつけ、死を覚悟の奮戦ぶりを見よやとばかり、敵陣

に斬って入る。

(付心) 其人の付。

(付味) 前句の非常に緊迫した状況・気分を受け、付句もまことに容易ならぬ決意を付け、内容と言ひ、表現と言ひ、相呼応して、激しい気魄を感じさせる。響の付の好き見本である。

(転じ) 打越・前句の恋の気分から一転して、戦場の修羅場となった。転じは十分である。

(補説) 私の解釈は天野雨山(「猿蓑連句評釈」)・宮本三郎(「校本芭蕉全集」)の説を受けたものであるが、古来の学者の多くは、前句を女性と考えたため、解釈に窮したものが多し。その中にも

○前句を女性と見、付句も女性として、「思乱れたる女の終に思決めたるころ」(「露伴評釈猿蓑抄」)、「女のいたく取乱した体」(浪本沢「芭蕉七部集連句鑑賞」)などと解している。

○前句を女性、付句を男性と見る説、「意の上の繋がりはや、漠然となった憾みがある。それは前句はどうしても女であるべきだが、この句の死狂ひはむしろ男と見られるからである」(額原退蔵「日本古典読本芭蕉」)などの確な解が付けられないもの。

○前句を女性としたが、付句の時には見立替えて男性としているもの。「飯盛女の卑しい仕草を武者の体に見替へたのだから、多少の無理は致し方なく、兜下地の髪を梳るさまと見做したとすべきであろう」(阿部正美「芭蕉連

反覆往来曲節を尽せる虚実の虚実も、豈外にもとめんや」(「俳諧古集之弁」)、「瘦骨といふより、こゝに至て人倫六句変化の手段、俳諧最一なり」(「猿蓑四歌仙解」というような賞讃の辞が多いのも当然であり、まさにこの「鶯の羽も」の巻の白眉として、芭蕉の作品中でも、最も光彩を放っている個所と言えるであろう。この句については先号に佐藤廣幸氏の貴重な説がある。再読して欲しい。

29

おもひ切たる死ぐるひ見よ

青天に有明月の朝ぼらけ

去来

(秋。有明月。人情無)

(現代語訳) 明け方の青空には残月がほのかにかかり、戦士たちは勇氣凜々として、決死の働きを見よと打って出るのである。

(付心) 通句。天相の付。

(付味) 響。まず前句の激しい気分に応じて、「青天に」と強い調子で打ち出したところが、響きあっている。月の定座として月を出したのであるが、単なる叙景に終らず、内容としての澄み切った青空は、思い切った人の爽かさを象徴し、「ありあけ月のあさぼらけ」の韻を踏んだ響きも効果的である。

(転じ) 打越は人事、それも何か落ちつかない、いらいらした状態を現わす句であったのに対して、これは全く人情無、しかも静かに澄みきった気分が漲っており、転じの

句抄第八篇)

○から○まで、前句「せはしげに櫛でかしらをかきちらし」を女性の句と見れば、いろいろの無理があり、付句と辻褃を合わせても、どうしても不自然さが残るのである。

この句は、前句にあった恋の意を転じて軍体にし、戦場の勇士のさまとしているので、何句か続いた恋の気分も一掃した「恋離れ」の付け方である。

また、「瘦骨の……」の句から、この「思ひ切たる……」の句まで六句、すべて人情の句である。俳諧(連句)は、いかに美しい叙景の句人情なし(場)の句を続けても、決しておもしろくはならない。一巻のいわばヤマ場ともいいうべき盛り上がり場面は、必ずこの人情の句の続いたところであるが、この人情の句をうまく「三句の転じ」を果たしながら続けることは大変難しいことである。俳諧(連句)においては、このような付合を「逆茂木」と言った。「逆茂木」とはもともと、敵の侵入を防ぐため、茨や木の枝を逆立てて垣に結った防禦物のことであるが、俳諧(連句)の道では、このような障害物をのりこえのりこえて、連衆が「三句の転じ」をはかりながら人情の句を続け、一巻の興を盛り上げるのを言うのである。この所の六句は、「瘦骨の……」(人情自)、「隣をかりて……」(人情自)、「うき人を……」(人情自他半)、「いまや別の……」(人情自他半)、「せはしげに……」(人情他)、「おもひ切たる……」(人情自)と、打越が同じものにならぬよう工夫しながら続け、盛り上げていく。「此場や巻中の遊び所にして、

お手本のような句である。

(補説) ここは月の定座である。前句まで逆茂木が続き、しかも極限の情にまで達している人情の纏れをどのように捌いてどのような月を出すか、一座の者が固唾を呑んで見ているであろう。それに応えて、これまでの人事を一転して、豁然とひらけた叙景の月を出し、付味・転じ、まさに理想的な境地を示している。これは芭蕉随一の門人と称された去来にしても、誇るべき傑作である。浪化(一六七一一七〇三)の「蕉門俳諧随聞記」には、前句からの付合を出して、「是すごき場のがさぬ句、大事也と、翁も称美(し)けるとなん」と伝えている。まことに「猿蓑」の中でも特筆すべき好付句の一つである。

私は、この句を見ると連歌の「菟玖波集」(二三五六序)に出ている有名な付合、

罪のむくいはずもあらばあれ

月残る狩場の雪のあさぼらけ

救済

を思い出す。この付合は「連歌十様」(二条良基著)、「筆のすさび」(一条兼良著)、「延徳抄」(猪苗代兼載著)などに絶賛されている有名なものであるだけに、去来がこの句を付けた時、彼の意識のどこかにこの句が存在したのではないかと思うのである。これももちろん想像であり、学問的根拠はない。ただ、私にはどうしても、この二つの句が何らかの関連があるのではないかと思われるまでのことなのである。

「吉野」の恋句

秋元正江

連句集「吉野」は、ACCで明雅先生に学ばれて伝道書を受けられ、武翁賞を受賞された猫蓑会の会員八名が、昭和五十九年十一月から、平成二年二月迄に巻かれた歌仙二十七巻、二十韻六巻が入っております。

先ず表紙のページ・白・濃い紅の色襲ねのシンプルな装丁に目を奪われ、じくくりと歳月を重ねて醸された連衆の呼吸が読み手に伝わってくる感じが、昭和から平成に移るはざまのあたらしみを持った連句集でした。連句の鑑賞は一句一句のおもしろみ、付心、付味、三句目の転じ、序破急、遁句、遁句、玉がころんでいて、つぶがあるかというところでしようが、一巻の中で月・花と同じく大事なすばらしい恋の句、それに釈教、病体の句も入れて書かせて頂きました。

オレンヂの香に懐しむヴァレンシア

歌仙

孝子

黒人ボーイカフス真白き

朝の道

貞子

一病ありて継ぎし神職

歌仙

孝子

水槽に電気鰻の沈みをり

朝の道

瑞枝

冬齋微溢るマジヨリカの壺
青空に熱気球浮く綱とかれ

歌仙
連題

みづゑ
瑞枝

誰も知らない誰も見てない

連題

遊

思ふこと妻とたがへり描なでつ
彼女のキーのまじる鍵束

二十韻 正雄
花辛夷みづゑ

モジリアーニをもじりたる顔
背伸びしてくちづけしたる朝の駅

歌仙 貞子
新涼や 弘子

すっきりとぬけぬ夏かせもて余し
ふと思ひ出す故里の山

歌仙 淳子
卒業や 弘子

白き竜神赤き火を噴く
足の爪切らせることも愛のうち

歌仙 正雄
紅葉遊 遊

寂聴尼嵯峨野の庵も住みあきて
ちりめんじゃこで啜るお茶漬

二十韻 瑞枝
平成の御代 淳子

叩いて干してゆがむ夏足袋
逢ひたいと書くに書かれぬ暑気見舞

歌仙 淳子
引きゆく鴨 和子

エメラルド隠れるほどの胸の谷
成績トップ保険セールの

歌仙 貞子
冬齋微 瑞枝

集中、歌仙では「梅雨晴間」の森羅万象をたくみに切りとって、しおり、おかしみに溢れ、二十韻では「万愚節」に、一巻の中に充分歌仙の内容、ゆとりを持ったかきみひかれました。今後のご精進をお祈り致します。

蓑虫

付勝練習二十韻
東明雅

締切
投句 10月20日

蓑虫の音を聞に来よ艸の庵

初めて涼し掛けし濡縁

海岸線波頭真白に月ありて

飛ぶやうに行くホバークラフト

心太芥子きかせてすすり込み

制服脱いだ彼とくつるぐ

さりげなくお守りだよと犬はりこ

回教国は酒も御法度

バザールに水煙草吸ふ男たち

すこし疲れて美術館出る

見上ぐれば摩耶のあたりに雪しまく

客待つ暖炉あかあかと燃え

十三句目

治定

据え膳は食はぬと言った嘘もばれ

1 チョコレートつまみつつ読むラブレター

2 響き来る曲は皇帝圓舞曲

3 仲人を頼むと恋の占師

4 先生も時には迷ふ恋の道

5 どうしても捨てられぬ文かくし持つ

志げ子
智恵
美幸
鋭太郎
義人
妙子

芭蕉
正雄
千遊
淳子
よしえ
元子
和久
良子
正雄
鋭太郎
達子

※が残念である。6これも2と大体同じ情景である。ただ、喫茶店という言葉は入れない方がよかったのではなからうか。「B・G・Mひそやかに楽流れをり」位の方がおもしろい。7前句にびつたり付味で、一句としても人情他の句で申し分ないのであったが、残念なことにはいささかおとなし過ぎるというか、こはナオの恋であるから、もすこしあばれて欲しかった。8現代風俗の一面を取り上げおもしろい句、ただ大超越に美術館があるので、式目上は二句離れて差支えないだろうがやはりちょっと気になるのである。9これも現代風俗の一面であろうか。お見合だから自他半であるという考えもあるが、かけもちでやっているのは自分であるから、これも自の句と見るべきであろう。10これはまたすごい句が出たものである。お化け屋敷にでも入ったかのようで、こうなれば、あかあかと燃えている暖炉も何となく気味の悪いものに見えて来る。付味もよく、転じも利いているし、一巻の中にこのような妖怪味のあるものを入れるのも変化があってもおもしろいが、このあとをどう処理するかが問題であり、また、恋の句をこは頂戴したいので採用しなかった。11これも現代風俗の一面である。子供たちは学校から帰っても、昔のように友達と外で遊ばずに、ひとりファミコンゲームに夢中になっている。これでいいのかと心配するのだが、この句、前句にはかすかに付き、転じもよい。12このような気分になることは誰でもあり、おもしろいと思うのだが、この巻ではすでに回教国が出ておりその風俗も出ているので、さらに異国

6 BGMひそかに流す喫茶店
 7 母に似し女の情の濃やかに
 8 カラオケの設備も出きし公民館
 9 お見合もあちらこちらとかけもちし
 10 丑三つの空屋にどつと笑ふ声
 11 新品のファミコンゲームに兎は夢中
 12 常夏のハワイへ行つて暮らさうか
 13 何事も見て見ぬふりの幫間
 14 背の君に心尽しの茶懐石
 15 仲人の約束の刻娘居ず
 16 大胆なサイドスリット黒ドレス
 17 縁談に王女のごとき夢を追ふ
 18 聞え来るあれは亡者の梵音か
 19 断りに来た縁談を言ひ出せず
 20 夫より塾婦りの子大切に

1 チョコレートを食べながら恋文を読み、その恋人が来るのを待っているという情景はよく分かり、おもしろいと思う。ただ、打越が自の句だから、「チョコレートつまみ恋文読む女」とでもすれば、他の句になるが、それでは原句のおもしろさはなくなるだろう。2 前句を喫茶店と見立てた場の句、軽くてよい。3 一句の意味が不分明で、前句は占師の店の有様かとも思ったが、どうもしっくりしなかった。4 前句と非常に離れて付けているところはおもしろいが、一句としてはあまりにも平凡すぎる。5 この句も1と同じく人情自の句であろう。付味はおもしろいのである。

美 鈴
 雅 代
 とも子
 欽 吾
 道 郎
 謙 太郎
 千 雪
 八 郎
 幸 均
 智 子
 きみ子
 美代子
 雄次郎
 美 和

を出すのは如何かと思われる。13 幫間は太鼓持ちである。遊女とお客がどんなことをやっても、見て見ぬふりをするのが、職業上必要というわけであろうが、これはおもしろい恋の句であろう。14 客設に茶懐石は実にぴったりであり、ぴったりすぎる位である。しかもその茶懐石は御亭主のため心尽しのものであるとなれば、これもあまりにまともすぎよう。悪いとは言わぬがおもしろさは生れないのである。15 仲人さんが来るというので家中大騒ぎしているのに、当の娘は結婚の相手が気に入らぬのか、ブイと居なくなってしまう。困りますね。このごろの若い娘は、フロントニ16はその家の女主人公の服を述べただけであるが、これだけで恋の句としては上々である。付味もよく、転じもよい。ただ、裏の恋句に「制服脱いだ彼とくつるぐ」という句があるの、採用できなかつた残念である。17 これも恋句としておもしろいが、人情自の句であろう。18 これは10と同じ妖怪趣味の付句で、負けず劣らずの凄味のある句である。おもしろいが10と同じ理由で採用しなかつた。19 こんなことがよくあるもので、一句としてはおもしろく、自の句めいているが、話の相手がそこに居ることは明らかで自他半の句と見るべきだろう。20 これも男性軽視の風潮の一端、慨嘆にたえない。さて、治定の一句、据ゑ膳とは女性が男性に迫ること、そんなことはいやだと言っていた男も、もてなしのよさについてふらふらと応じてしまったという、ちょっと悪い句であるが、ナオだからこの位の迫力はあってもよいだろう。次はこの恋をもう一句続けて下さい。

沙羅の会

歌仙四巻

平成二年五月三十日
 於 京 橋 区 民 館

五月尽

東 明 雅 捌

金の酒箔ひらひらと五月尽
 色青々と皿のそら豆
 子らの声ブルサイドにはしゃぎあて
 ベンチで開く読みかけの本
 有明の面をよぎる大鴉
 コッそりと行く茸持りの人
 秋惜しむ身をしみじみと山の湯に
 自由にさせて愛してるなら
 国籍は問はず言葉はいりません
 いらぬ車をだまされて買ふ
 門前にどっかりすわるブルドッグ
 寒橋の音とぎれとぎれに
 はみ出した布団の男足に月
 夢のまた夢還暦となり
 流水算鶴亀算に植木算
 和食洋食中華食堂
 額づけば靖国神社花吹雪
 老のうららに聞香の会

明 雅
 和 子
 一 恵
 雅 子
 達 子
 弘 子
 代 子
 和 子
 達 子
 弘 子
 代 子
 和 子
 達 子
 弘 子
 代 子

ナオ
 百千鳥着々すすむロケーション
 静まりかへる人魂の池
 瓜むきてもてなす媪くになまり
 レーゲルックのかしこまる膝
 うすうすと口のうぶひげお坊ちゃま
 気をつけなさい女狼
 思ひきり抱かれて息のつまりさう
 カランひねればほとぼしる水
 ミヤンマーの仏舍利塔に葬りしか
 ひとかたまりに曼珠沙華咲く
 澄む月に新走りなど酌みかはし
 ナウ
 こほろぎ鳴けば思ひ出す母
 政権のちよつと遠のく土井たか子
 ゴルフしながら草を抜くなり
 毎日が日曜日なり雑魚すくふ
 坂の上には陽炎のたち
 振袖の三尺あまり花衣
 雛の調度につけし定紋

代 恵
 和 子
 達 子
 弘 子
 代 子
 和 子
 達 子
 弘 子
 代 子
 和 子
 達 子
 弘 子
 代 子
 和 子
 達 子
 弘 子
 代 子

南風

氏原正雄 捌

並木眩し胸一杯に南風
 更衣して社員颯爽
 湯沸器いろいろの声聞こえてきて
 エッセイ書けばいつも長すぎ
 明星の近づいてくる三日の月
 蜻蛉とまる濡縁のへり
 発心の不借身命秋小寒
 「実は」と娘ハッとする親
 コンピューター不倫願望までは出さず
 シャイなところがちよつと絵になる
 吉兆の茶懐石にてお正客
 家代々のかまど猫棲む
 森閑と月の光の冴えわたり
 夢ひとつ消し拾ふ幸せ
 新喜劇笑ひつづけてゐて涙
 道頓堀に映る紅い灯
 花びらを浮かべし酒のなみなみと
 笛の音そろひ安良居の傘

正千江 貞子 利子 町子 江子 雄
 江利 貞子 利子 町子 江子 雄
 江利 貞子 利子 町子 江子 雄

ナオ
 しゃぼん玉児があゆみ出す靴を持ち
 間違ひ電話何回となく
 あつてなき値段告げらる骨董屋
 雨のそば降るパリの巷角
 黒ドレス、ムーランルージュの羽根扇
 目くるめく夜の襟もとのあざ
 許してと書かれし文字のささ乱れ
 晶子の歌に荒るる冬涛
 奥の部屋敷わらしのいるやうな
 看とりやさしき孫嫁の粥
 月団々はすむが如く山を出づ
 銀色の皿錆びる露霜
 ナフ
 借りてきしアニメの源氏実紫
 書店やりくり難しくなる
 常に世の下積みとして老い迎へ
 春の珍事かホールインワン
 散りもせで花の重たさかさね合ひ
 あふれる如く鳥の囀り

江町貞 貞利 貞子 利子 町子 江子 雄
 江町貞 貞利 貞子 利子 町子 江子 雄

金魚草

内田麻子 捌

親に似し小犬育ちて金魚草
 濡縁の端伝ふ黒蟻
 サーフターのボードきらめく海原に
 パーベークューにはマシユマロを焼く
 引越の荷物に月の影長し
 新聞配達霧の中より
 警策の音聞こえて散る銀杏
 鏡見ながら伸ばす口髭
 ハネムーン送るグループ間違へて
 成田離婚の流行る此頃
 泰西の名画買ひ込むお宅族
 千鳥の歩く水涸れの川
 信玄の隠しいで湯に月冴えて
 引売りの品あれこれと選る
 持病出て明日の天気よく当り
 愛用ベスト七つポケット
 ベカ舟の竿に崩るる花筏
 山になぞひてかかる初虹

麻子 淑子 啓子 淳子 好子 敏子
 淑子 淑子 啓子 淳子 好子 敏子
 淑子 淑子 啓子 淳子 好子 敏子

ナオ
 春闘の似顔絵かかげのびやかに
 コルクの落ちたブランデー飲む
 鹿革の手帳びつしりスケジュール
 合併会社々々名きまらず
 岩燕住みつくと言ふ中華街
 朱実命と腕に入墨
 そつとビール飲んで今宵も荒稼ぎ
 湖畔の宿をくちづさむひと
 蹴轆轤を用ひ陶工井戸茶碗
 旅の土産のビーフジャーキー
 月面を歩く夢みて醒めにけり
 足をちぢめて漸寒の朝
 ナフ
 落ち鮎の瀬淵わかたず流れつつ
 関更・北枝墓を並べて
 境内に輪投遊びのきりもなく
 はんこたんなで畑を打つ人
 花衣宝づくしの帯を締め
 カリオン時計麗らかな空

淳世 淑敏 淑敏 淑敏 淑敏 淑敏
 淳世 淑敏 淑敏 淑敏 淑敏 淑敏

忙中の夏

下鉢清子捌

忙中の夏を京橋あたりかな
 新茶のびらの揺れる軒先
 キャンパスの絵具の色の極まりて
 靴を磨いて過す週末
 見上ぐれば雲の絶え間に月浮かび
 邯鄲の音を友と聞きあふる
 秋閑けて静まりかへる御師の家
 ワンダーフォーゲル広げたる地図
 七宝のロケット彼の写真秘め
 受話器にちゅつと甘きくちづけ
 朔太郎の青猫膝をかかへ読む
 素人離れの株と麻雀
 枯れ果てし河原を濡らす月の光
 百鬼夜行に出会ふ凍て道
 マツカリをキムチ肴に酌み交し
 大統領をやつと送って
 子の頬に咲き満ちし花耀へる
 風琴ひびく暮れかねる頃

清子遊 元子遊 瑞枝亭 元枝亭 遊元枝亭 遊元枝亭 遊元枝亭

揚雲雀落雲雀とて友雲雀
 ドームはるかに望むフィレンツェ
 伝来のレシピノートを娘にゆづり
 小紀老礼と仇名呼び合ひ
 自転車で恋の坂道かけおりて
 抱擁あつく草茂る中
 銀鱗の光りて鮎のまた釣れぬ
 肩パッドほど肩書を持ち
 心労の重なる果の脱毛症
 同窓会を取りしきる奴
 たらちねの有明月の夢に現れ
 露くさ描きし懐紙取り出す
 ひいやりと伊万里の壺の藍の肌
 馬身じろがぬ蹄鉄屋前
 泣き笑ひ喜劇人生幕を閉ぢ
 ジョギングの背に雨の霽れゆく
 パラボラのぬつと覗きし花の山
 紙飛行機を飛ばす野遊び

亭清元亭元枝遊同枝元清遊枝遊亭遊元亭

第三十四回 猫蓑会 歌仙七卷

参加者四十名

平成二年七月十八日 於 関口松声閣

噴水

市野沢弘子 捌

極暑

内田麻子 捌

夏木立

梅田利子 捌

噴水の風にくづるる白さかな
 蝉時雨して公園の午後
 夏座敷新しき顔集りて
 歳時記を繰り案ず七七
 十日月生まれなむ児に語りかけ
 衣被盛る竹の編笊
 乃木祭地下足袋穿きのギャルもゐて
 ロックギンギン彼の手拍子
 此の頃は学生結婚大はやり
 鳩は自由に空を羽搏き
 東から西へ流るる人の群
 揺椅子に編む毛糸ふかふか
 北海の雪像照らす蒼い月

弘子 元子 澄子 久美子 正敬 啓子 同 元 美 澄 美 元 啓

四肢投げて猫の寝て居る極暑かな
 青葉がくれに登校の子等
 船見ゆる島に潮騒ひびくらん
 イーゼル立ててパイプくゆらす
 テレビ塔久に晴るれば細き月
 鬼灯さげて帰ってくる人
 夜学子の集ひ賑か喫茶店
 恋文渡す相手間違ふ
 金婚式迎へていまもそそっかし
 髭の手入れに一家言あり
 マンションの持主今日も畑仕事
 汽笛消えゆく多摩の横山
 月冴ゆる雲ひとつなき中天に

麻子 正雄 淳子 よしえ 淳 篤 雄 淳 篤 雄

街騒を鎮めて深し夏木立
 短き影の灼くる鋪道
 もの言はず製本はげむ親子にて
 顎ではさんだコードレスフォン
 小魚港ほどほどの荷を揚げる月
 西南西にかりがねの列
 蓑虫の鳴き声求め旅ひとり
 おみくじ引けばいつも末吉
 好きな彼誘ふ彼とは別な彼
 振られ上手とうそぶいてゐる
 時勢には勝てず明治座取り壊し
 育児休暇でストのパパ族
 月凍ててスパイスに凝るキャセロール

利子 瑞枝 みづゑ 隆一 郁子 良子 同 枝 郁 一 良 五

